

原著

# 不育症が夫の対人関係に及ぼす影響と夫へのサポートに対する夫婦の態度の関連性

高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門（人文学部人間文化学科専任）  
増田 匡裕

## 抄 録

本研究は不育症の体験が夫（胎児の父親）の対人関係に与える影響を分析し、夫に対するソーシャル・サポートの必要性を探ることを目的とした探索的研究である。当事者グループ会員の40組の夫婦が個別自記入・郵送回収式の質問票に回答した。流産体験が夫の対人関係に及ぼす影響を説明する自由記述回答（アカウント）は帰納的分析法でコード化された。夫へのサポートに対する夫婦の態度を組み合わせ、40組の夫婦は「妻もしくは両方が否定的」「夫婦共に肯定的」および「妻のみ肯定的」の3群に分類された。クロス表分析の結果、「妻もしくは両方が否定的」である夫婦の多くが夫の対人関係に流産の影響はないと記述しているのに対し、「夫婦共に肯定的」な夫婦はなんらかのよいまたは悪い影響について述べているケースが多かった。さらにサポート源に関する変数とのクロス表分析からは、「夫婦共に肯定的」群と「妻のみ肯定的」群の違いが示唆される結果が得られた。

キーワード：不育症、夫（父親）、喪失体験、アカウント、ソーシャル・サポート

## I. 緒 言

流産・死産・突然死で幼児や新生児を亡くした家族に対する心理的・社会的サポートは、内外の医療・福祉の専門家や関連分野の研究者が取り組んでいる研究分野である。しかし、その大多数は母親（妻）に対するサポートに関するものであり、父親（夫）に注目したものは少ない。周産期医療におけるソーシャル・サポートの研究において、夫（父親）を研究対象とするものは研究計画自体を立てにくい未開拓の分野であるため<sup>1)</sup>、先立つ仮説や理論の構築には学術的なデータの報告を増やすことが急務である。

周産期における胎児・新生児の喪失に対して、夫婦の悲嘆の度合いやその影響の深刻さが異なり、妻と比較して夫の示す苦痛が軽いことは多くの研究者の一貫したデータで指摘されて久しい<sup>2-4)</sup>。その一方、夫のみを対象とした質的インタビュー研究で報告されているのは、出産の主体が女性であると考えられる周囲の人々（医療者を含む）

が自身の苦痛を過小評価すること、その「非公認の悲嘆」<sup>5)</sup>であるがゆえの欲求不満や孤立感、妻を支える立場である自身に対するサポートの希求である<sup>6,7)</sup>。夫へのサポートを検討する研究には、研究対象が夫婦単位か夫のみかで異なる結論になりがちというだけではなく、夫が対象となることで本来不可分である妻の視点が背景に押しやられがちになる別の問題もある。

夫に対するサポートへの手がかりを探索的に分析する本研究は、不育症の当事者である夫婦を対象に、夫の対人関係に流産体験が及ぼす影響のアカウント（語りや文章で喪失体験を説明・解釈すること<sup>8)</sup>）を求めることで、夫にとって流産という喪失体験がどのようなものであるかをまず明確にする。次に、夫が周囲の対人関係から受けたサポートへの評価やその期待に表れた態度と喪失体験のアカウントの関係性を分析し、サポートに肯定的な夫婦と否定的な夫婦、また夫婦の態度が合致している夫婦とそうでない夫婦の違いを考察して

今後の研究課題を提案する。

## II. 方法

探索的研究である本研究に最適なのは半構造化された面接法であるが、対象へのアクセスが容易でないため、代替手段として質問紙法が用いられ

ている。夫用質問票と妻用質問票の質問文は同一ではないが、夫用と妻用に共通する趣旨の質問への回答を分析対象としている。表 1 に示したのは実際に用いた質問文のうち、自由記述回答を求めるものである。表 1 以外にも本稿に関連する質問

表 1 質問文の抜粋

コード化	夫用質問票	妻用質問票
○	質問 身近な人の全員または一部に流産・死産のことを知ってもらうことには、もしあるとすれば、どのようなよい点がありますか。	
○	質問 身近な人の全員または一部に流産・死産のことを知ってもらうことには、もしあるとすれば、どのような困った点がありますか。	
○		質問 2-4 あなたがたご夫妻が流産・死産でお子さんを亡くされていることは、あなたとは面識のない人たちと、あなたの配偶者(夫)との対人関係に無関係なことだと思われませんか。(後略)
○		質問 3-5 あなたがたご夫妻が流産・死産でお子さんを亡くされていることは、あなたとも面識のある方々と、あなたの配偶者(夫)との対人関係に無関係なことだと思われませんか。(後略)
	質問 5-A あなたの配偶者(妻)の様子を気づかう言葉を掛けられたときの、典型的な事例、もしくは印象に残っている事例を 1 つ思い出してください。(中略) 気づかいをされたことに対する、あなたの感想はどのようなものでしょうか。(後略)	質問 4-A 「あなたのご主人はどうしてる?」「彼は大丈夫?」というように、あなたの様子ではなく、あなたの配偶者(夫)の様子を気づかう言葉を、直接誰かから掛けられたことはありますか。(中略) 配偶者(夫)に対する気づかいはされたことについて、あなたはどのような感想をおもちでしょうか。(後略)
	質問 5-B あなたの配偶者(妻)を気づかう言葉を掛けられたことのない方におたずねします。そのような気づかひの言葉は必要だと思われませんか、不要だと思われませんか。	質問 4-B あなたの配偶者(夫)を気づかう言葉を掛けられたことのない方におたずねします。あなたの配偶者(夫)のことを気づかう言葉は必要だと思われませんか、不要だと思われませんか。
	質問 6-A 「きみのほうは大丈夫?」というように、あなたの配偶者(妻)ではなく、あなたご自身の様子を感じかう言葉を、直接誰かから掛けられたことはありますか。(中略) 気づかひをされたことに対する、あなたの感想はどのようなものでしょうか。(後略)	質問 5-A あなたの配偶者(夫)に対して、直接「きみのほうは大丈夫か?」というように、彼の様子を感じかう言葉を掛けた人がいたという話を聞いたことがありますか。(中略) あなたの配偶者(夫)が気づかひの言葉をかけられたことを耳にしたときのあなたの感想はどのようなものでしょうか。(後略)
	質問 6-B あなたの配偶者(妻)ではなく、あなたのことを気づかう言葉は必要だと思われませんか、不要だと思われませんか。	質問 5-B 仮にどなたかが彼に気づかひの言葉を掛けたという話を耳にされたとしたら、あなたはどのようなお気持ちになるでしょうか。
	質問 7-A 誰かがあなたのことを気づかひかけているという話を耳にしたことのある方におたずねします。(中略) その方々があなたのことを気づかひかけているのをあなたに直接伝えないのは、なぜだと思われませんか。(中略) そのことを耳にしたときのあなたの感想はどのようなものでしょうか。(後略)	質問 6-A あなたの配偶者(夫)から、誰かからあなたを気づかう言葉を掛けられたという話を直接聞かされたことのある方におたずねします。(中略) あなたの配偶者(夫)に対して、あなたを気づかう言葉を掛けることは、同時に彼のことを気づかうことを意味するでしょうか。(中略) その方々が、本当にあなたのことを気づかひかけていると思われませんか。(後略)
	質問 7-B もしどなたかがあなたのことを気づかひかけていることを耳にされるようなことがありましたら、あなたはどのようなお気持ちになるでしょうか。	質問 6-B あなたの配偶者(夫)から、誰かからあなたを気づかう言葉を掛けられたという話を聞かされたことのない方におたずねします。もしそのようなことがあった場合、あなたの配偶者(夫)には、そのことを自分に話して欲しいと思われませんか(中略)。あなたの配偶者(夫)に対する気づかひの言葉は必要だと思われませんか。
○	質問 8-1 夫婦関係以外の身近な対人関係において、流産・死産を体験したことに関連すると思われるなんらかの不都合を体験されたことがありますか。	
○	質問 8-2 夫婦関係以外の身近な対人関係において、流産・死産体験がきっかけと考えられる何かよいことを体験されたことがありますか。	

としては、夫が自身の対人ネットワークに流産のことを話すことに対する妻の態度を測定する質問群（妻用質問票のみ）と、夫が興味を示しているサポート源に関する質問群（夫用質問票のみ）があげられる。

不育症の当事者である女性のピア・サポートを目的としたNPO法人の協力を得て、その団体の会員を対象者とした質問紙調査を実施した。会員（女性）とその夫に対して妻用と夫用の1組からなる質問票一式を送付し、同封した2枚の返送用封筒（返信用切手貼付済み）を用いて夫婦別々に研究者の許へ返送できるようにした。会員の個人情報保護のため、発送業務は会員名簿を管理する担当理事に委託された。調査実施時（2004年3月）における会員数に合わせて205部の質問票が作成された。197部が実際に発送されて3ヵ月半のうちに、夫用41通と妻用57通が返送された。夫婦それぞれの質問票にはあらかじめ「#001」から「#205」までの同じコントロールナンバーが付けられており、そのマッチングにより40組の夫婦の参加が確認された。調査時点での夫の年齢は平均36.2歳（SD = 4.2）、妻の年齢は35.1歳（SD = 3.8）で、結婚期間は平均6.5年（SD = 3.1年）であった。妊娠回数2～9回（M = 3.9; SD = 1.6）に対して、流産の回数は2～7回（M = 3.1; SD = 1.3）であった。

質的分析の対象となったテキストデータは、流産体験が夫の対人関係に与える影響に関するオープンエンドの質問項目への回答である。夫用の「質問3-2」「質問3-3」「質問8-1」および「質問8-2」、妻用の「質問2-4」および「質問3-5」が該当する（表1の○印）。電子ファイル化されたテキストを、2台のコンピュータに搭載された質的分析ソフトウェアAtlas.ti第5版を用いて、2名のコーダーがコード化した。両名ともに心理学専攻の22歳の女子学生であり、うち1名は自身の学部卒業論文でコーディングの経験がある。トレーニングセッションでの両名の判断の一致度は高く、コーダーとしての能力は十分である。両名は、互いの画面を見比べないように配置された席で、同時に8時間の作業を行った。

探索的・記述的研究である本研究で用いたのは、

ボトムアップの帰納的なコーディング法である。帰納的な概念モデル構築に有効なのは、グラウンデッド・セオリー・アプローチが提案する継続的比較法である<sup>9,10</sup>。これは定義済みのコードを当てはめるのではなく、分析対象のテキストをケースごとに見比べて、すでにコード化されたものと類似しているか否かを基準に、既存のコードに含めるか新しいコードを付けるかを判断する分析法である。

コードの集約作業は以下の手続きで本稿の著者が1名で行った。同じテキストに対して両者が同一のコード名もしくは類似したコード名を付けている場合はそのコードが採択された。一致していないケースのうち、一方のコーダーがコードを付けていないものについては、著者が一貫性ありと判断できるものが採択された。すべてのコードは、2名のコーダーと著者の3名のうち、少なくとも2名が合意したものとイえる。

夫（父親）に対するソーシャル・サポートへの態度に関連があると思われる要因を夫婦単位で探索的に見出すため、本研究では「夫へのサポートに対する夫婦の態度」変数と他の名義尺度変数との関連を分析する。そのため40組の夫婦それぞれは、夫（父親）に対するソーシャル・サポートのニーズや評価など態度に関する質問への回答に基づいて、「夫婦共に否定的」「夫婦共に肯定的」「夫のみ肯定的」「妻のみ肯定的」の4群に分類された。しかし、「夫のみ肯定的」な夫婦が1組のみであり、それ以降の統計的分析が困難となるため、少なくとも妻が否定的であるという共通点から「夫婦共に否定的」な10組と同一のカテゴリーに併合され、「ATS：妻もしくは両方が否定的」群11組として分類された。この他の2群は「ATS：夫婦共に肯定的」群16組、および「ATS：妻のみ肯定的」群13組である。他の概念と区別するため、本文中ではソーシャル・サポートに対する夫婦の態度を示す群を示す際に“ATS (Attitudes Toward Social Support)”の符号を付ける。これら3群の分類の基準となる質問は夫用質問紙の「質問6-A」「質問6-B」「質問7-A」および「質問7-B」や妻用質問紙の「質問4-A」「質問4-B」「質問5-A」および「質問5-B」で、サポートの必要

性や実体験に対する評価を直截問うものであるため、分類作業は本稿の著者が1名で行った。

### Ⅲ. 結果

自由記述テキストに表れた流産体験が夫の対人関係に与える影響を示すコードは、文化人類学者 Spradley (1979) が提唱するドメイン・アナリシスにより、最終的に5つの最上位の категорияに分類された。ドメインとはインフォーマントがもつ自身の文化の知識の単位のことである。この集約作業は9種類の普遍的な意味関係に基づいて下位コードを上位コードに集約するものである<sup>11)</sup>。このデータの分析には9種類中5種類の意味関係が用いられた(図1)。1つのテキストに異なるコードが複数付けられている場合、それらのコード同士は類似した概念を表すコードに集約された。夫婦の質問票の項目の違いにより一方にしか出現しないコードのうち、類似とみられる概念は同一の categoria に含められた。

これらのコードは全体的に、周囲の対人関係からの偏見や無理解による心ない言動、対人関係の回避などのネガティブな影響を示す最上位カ

テゴリーである「IPR: 悪い影響あり」と、周囲の対人関係からの配慮や理解などのサポートを得られるなどのポジティブな影響を示す最上位 categoria である「IPR: よい影響あり」に大別される。これら2つとは別に、具体的な対人行動の変化ではなく、Erikson の定義する生殖性、すなわち経験から得られたものを他者へ還元できる成熟性<sup>12)</sup>を示すコードは、「IPR: 人間としての成長」という最上位 categoria に含まれている。これら3つには属さない最上位のコードとして、「IPR: 影響なし」と「IPR: なんらかの影響あり」の2つが抽出された。他の概念と区別しやすいように、本文中においては流産体験が対人関係に及ぼす影響を示すコードには「IPR (Impact on Personal Relationships)」の符号を付け、二重鉤括弧で表記している。

図1に示されたこれらの最上位 categoria のうち、「夫へのサポートに対する夫婦の態度」との連関があると思われるのは、夫婦それぞれの「IPR: 悪い影響あり」(夫については表2、妻については表3)および妻の「IPR: よい影響あり」(夫

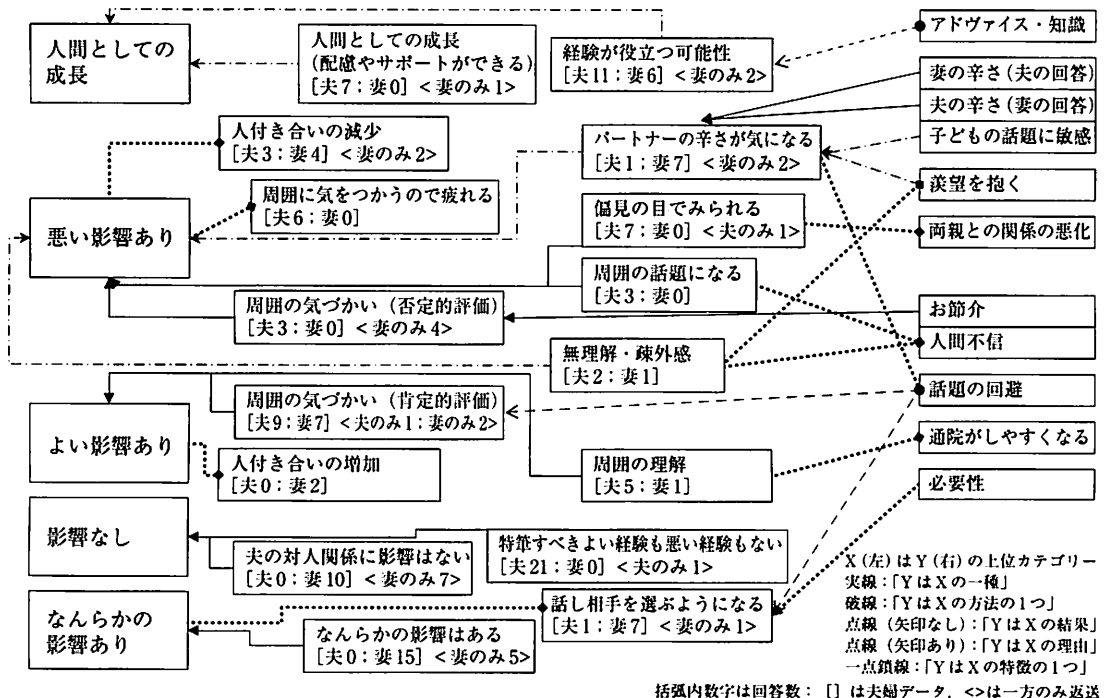


図1 ドメイン・アナリシスを用いたコード集約の過程

表2 「夫へのサポートに対する夫婦の態度」と「悪い影響あり」最上位コードに相当する記述の有無との連関（夫の回答）

	夫の自由記述回答の有無		計
	記述なし	記述あり	
「妻もしくは両方が否定的」群	8	3	11
「夫婦共に肯定的」群	5	11	16
「妻のみ肯定的」群	4	9	13
計	17	23	40

$\chi^2(2) = 5.67, P < 0.08, \text{Cramer's } V = 0.38.$

注：数値はケース数（組）。P値はフィッシャーの直接法による正確有意確率（両側検定）。

表3 「夫へのサポートに対する夫婦の態度」と「悪い影響あり」最上位コードに相当する記述の有無との連関（妻の回答）

	妻の自由記述回答の有無		計
	記述なし	記述あり	
「妻もしくは両方が否定的」群	11	0	11
「夫婦共に肯定的」群	11	5	16
「妻のみ肯定的」群	7	6	13
計	29	11	40

$\chi^2(2) = 6.55, P < 0.05, \text{Cramer's } V = 0.41$

注：数値はケース数（組）。P値はフィッシャーの直接法による正確有意確率（両側検定）。

については表4、妻については表5）である。他の2群に比べて「ATS:妻もしくは両方が否定的」群は、夫婦共に流産体験が夫の対人関係に悪い影響を及ぼすとは考えておらず、妻はよい影響についても言及していない。「ATS:夫婦共に肯定的」群および「ATS:妻のみ肯定的」群の夫には「IPR:悪い影響あり」のカテゴリーに分類される記述が比較的多い。以上より、夫へのサポートを肯定的にとらえない夫婦は、夫の対人関係に流産が影響を及ぼすとは考えていないと思われる。「IPR:人間としての成長」についてはサポートに対する態度と関連はみられなかった。

次に妻が肯定的である夫婦の2群、すなわち「ATS:夫婦共に肯定的」群および「ATS:妻のみ肯定的」群の違いについて、それぞれの群の夫婦の記述の抜粋を比較しながら分析する。これら2群は、残る「ATS:妻もしくは両方が否定的」群に比べて、「IPR:悪い影響あり」という記述が夫および妻に多いという点で共通しているが、この最上位カテゴリーに含まれる下位コードに違いがみられる。表6は「ATS:夫婦共に肯定的」群、表7は「ATS:妻のみ肯定的」群のケースから、「IPR:悪い影響あり」に分類されるコードを含む記述が豊かなものを抜粋したもの

表4 「夫へのサポートに対する夫婦の態度」と「よい影響あり」最上位コードに相当する記述の有無との連関（夫の回答）

	夫の自由記述回答の有無		計
	記述なし	記述あり	
「妻もしくは両方が否定的」群	8	3	11
「夫婦共に肯定的」群	10	6	16
「妻のみ肯定的」群	7	6	13
計	25	15	40

$\chi^2(2) = 0.91, P = 0.60, \text{n.s.}$

注：数値はケース数（組）。P値はフィッシャーの直接法による正確有意確率（両側検定）。

表 5 「夫へのサポートに対する夫婦の態度」と「よい影響あり」最上位コードに相当する記述の有無との関連 (妻の回答)

	夫の自由記述回答の有無		
	記述なし	記述あり	計
「妻もしくは両方が否定的」群	11	0	11
「夫婦共に肯定的」群	10	6	16
「妻のみ肯定的」群	10	3	13
計	31	9	40

$\chi^2(2) = 5.26, P < 0.07, \text{Cramer's } V = 0.36$

注: 数値はケース数 (組)。P 値はフィッシャーの直接法による正確有意確率 (両側検定)。

表 6 夫が「悪い影響あり」と記述している「夫婦ともに肯定的」群夫婦の自由記述回答の抜粋

ケース番号	夫		妻	
	自由記述回答の抜粋	コード	自由記述回答の抜粋	コード
#002	[Q3-3] 気をつかわれたくない。	周囲の気づかい (否定)	[Q2-4] 基本的に無関係であるが大切なことなので知ってもらってもよい。夫も通院することもあり、とくに会社では話すことが重要。	周囲の理解
	[Q3-2] それらの方々が体験されることのないよう気をつけられるようになること。(中略) 体験された時に相談相手となることができる。	経験が役立つ可能性	[Q3-5] もちろん無関係。理解されなくて辛いことも多いが、世の中いろんな人がいるということを知ってもらうのもよいと思う。	経験が役立つ可能性
	[Q6-B] 私のように初期の流産 (心音のない時) では必要ないかもしれないが、楽しみにしていた時には必要と思われる。			
#029	[Q3-3] その話にふれたくないのに話題となる。	周囲の話題になる	[Q2-4] すでに話をしておけば「子どもはまだ？」などの無神経な質問はされなくなると思います。また子ども中心の話題もないのではないのでしょうか。以前 (中略)、その方の子どもも自慢の話ばかり聞かされて、おこって帰ってきたことがありました。(後略)	子どもの話題に敏感 話題回避
			[Q4-B] 今まで自分のことしか考えていませんでしたが、このアンケートで夫も辛かったんだろうなということに気づかされました。(後略)	
#043	[Q3-3] 子どもがいて流産・死産を経験していない人々には、なかなか理解されないこと。	周囲の無理解	[Q2-4] 話す相手にもよる。私の家では、すでに子ども2人にめぐまれているので、同じような悩みをもつ人にならなくても話してもよいと思う。それ以外の人には、主人が話すようなことがないと思う。	話し相手を選ぶ
	[Q3-2] これから子どもを作ろうと思っている人々に知識を与えられる。	経験が役立つ可能性		
#078	[Q3-1] 心の痛みや人生観を理解してもらえる可能性があるのだ。	周囲の理解	[Q3-5] 主人のまわりの人たちは私に気をつかい接してくれました。(中略) 自身の知り合いまたは主人のほうの知人によって、今の自分があるように思えます。主人も同じだと思います。	周囲の気づかい (肯定)
#082	[Q8-1] 友だちの奥サンが妊娠していても、教えてくれなかった。うちが生まれたといったら、うちもって感じでいわれた。	人付き合いの減少	[Q3-5] 流産のことを知っている友人から「子どもはまだ？」など聞かれなくなっていたので、多少影響はあるのではないのでしょうか。	話題の回避
	[Q3-3] 私たちの身体に問題があるのでは? と思われたい、子どもへの考えが人よりも強いと思われそう。	偏見の目で見られる		
	[Q3-2] もしも身近な人がそうなった場合 (中略)、私たちがもそうだったということで「自分たちだけではない」「結構多い」と思えると少しは気が楽になると思う。私たちが他の人の体験を聞き、はげまされた。	経験が役立つ可能性		
	[Q7-A] テニス仲間は私がテニスに行かなくなったので、かなり落ち込んでいると思ってくれたらしい。(中略) 親戚は、流産の体験がある人がいたので、辛さをすごくわかってくれていたから		[Q4-B] 流産した時は自分のことで精一杯ですので、配偶者を気づかう言葉を掛けられても、あまりピンとこないかもしれません。(中略) 夫のことも少しは考えられるかもしれないので必要なと思います。	
#159	[Q8-1] 妻が死産した直後、姉が出産した。その姉と3年間、顔をあわせられなかった。	人付き合いの減少	[Q3-5] 流産の経験のある人や、親身になってくれる人とのつき合いが増えたように思う。	人付き合いの増加
	[Q3-2] 流産・死産の件 (私たちが体験したこと) を話題にしなくなる (私たちの前では)。	周囲の気づかい (肯定)	[Q2-4] あまり、親密というほどのつき合いがなかった人が流産していて、私たちの話をしたりして、心を割って話せるつき合いになったことがある。話す相手が増えることで、少しはよい面があると思う。	経験が役立つ可能性
	[Q6-A] (3年後に幼なじみの看護師から)「男だからってがまんすることはない。なきたい時にはなけばいい!」(といわれて) ひじょうに嬉しかった。3年間1人で悩んでいたのがいやされる感じがした。			

表6 (承前)

ケース番号	夫		妻	
	自由記述回答の抜粋	コード	自由記述回答の抜粋	コード
#186	[Q3-3] 女性が妊娠に対して、恐怖感をもつのではないかと思う。男性は割とそんなことはないだろうと思う。	周囲に気をつかうので疲れる	[Q2-4] 妊娠37週で死産した子どもがいるので、周りの人が自分の子どもの話をする時など複雑な気持ちになるようです。また、子どもがいる「普通の人たち」と死産・流産で子どもを失った「普通ではない自分たち」との間に線を引いているようなところもあると思います。一歩引いて他人をみるような様子の方がええます。あたり前に子どもがいる人たちには流産・死産の悲しみは伝わりにくく、疎外感をもち、人間不信に近い状態にもなると思われます。	人間不信
	[Q3-2] 普通では起こりえないことなので、もし他の誰かがそうなった時に、気持ちの落ち込みやその後の自分の気持ちのコントロールの仕方が、まるで知識がないよりは対処できるのではないかと思う。	アドヴァイス・知識	[Q4-B] 以前は、私自身が悲しみで一杯で、夫の悲しみということまで気がまわりませんでした。でも最近では夫にも悲しみを吐き出す場が必要で、助けが必要だと思っています。身体の痛みも伴う女性とは多少違うかもしれませんが、(中略)妻でさえ気づきにくい夫の気持ちこそ誰かの助けが必要なのかもしれません。	
	[Q6-B] あるにこしたことはないが、他人にうわべだけのことなら触れて欲しくなかったと思う。			
#203	[Q8-1] 流産を4回経験したので、回をかさねることにすべの物事に対して消極的でマイナス思考になりました。会社で仕事し、急に不安な気持ちになることが多く、辛かったです。(中略)会社や友人の誘いも断ることが多くなりました。今年1月に子どもが無事生まれてからは、少しずつ気持ちを明るくもてるようになりました。自分よりも妻のほうがずっと辛く、頑張っていると考えて乗り切ってきました。	人付き合いの減少 パートナーの辛さが気になる	[Q2-4] 影響はあると思う。流産したという経験は妻である私と同様の悲しみを感じているはずだから、その気持ちを抱えたま、普通に働かなければいけない、その感情を表には出せないということは辛いことだったと思う。また、子どもが生まれた人と話をする時も辛いことだったと思う。	パートナーの辛さが気になる
	[Q8-2] よいことはないが、今後、自分たち夫婦と同じ経験をしている人に会った時に、心理的な部分において相談に乗ることはできます。	アドヴァイス・知識	[Q3-5] 影響があると思う。流産を知りながら、そののちの接し方で、より親しくなる場合と疎遠になる場合があるから。相手が発産を知らない場合は関係ないと思う。	人付き合いの減少
	[Q6-A] (会社の先輩から)「奥さんもしんどいけれど、何事もなかったように会社へ入社して普通に仕事をしている自分もたいがいしんどいだろう。」(といわれて) 素直に嬉しいと感じました。		[Q4-B] 必要だと思う。夫は悲しみを抱えながらも、妻を励ましなくさめなければならないので、彼の辛い気持ちを理解し、気づかってくれる人は必要だと思う。	
#205	[Q3-3] 楽しくない思い出を必要のない人に知らせるのはプラスにならないかなと思う。	周囲に気をつかうので疲れる		
	[Q3-2] 自分たちについてきちんと理解してもらうことの1つに分たと思う。	周囲の理解	[Q3-5] 話すとしたら、話す必要な流れがあって話したのだからと思うので、そういう話もできる人ということでは影響もあるだろう。	必要性

注：ブラケット ( ) 内の「[Qx-x]」は質問番号。下線のついたコードは「悪い影響あり」に属するもの。

表7 夫が「悪い影響あり」と記述している「妻のみ肯定的」群夫婦の自由記述回答の抜粋

ケース番号	夫		妻	
	自由記述回答の抜粋	コード	自由記述回答の抜粋	コード
#036	[Q3-3] 流産するというのは何か身体的欠陥があるからという偏見が残っていると思うため。今、子どもがいるが、その子は妊娠中、治療を受けながら、生まれた。その治療薬の話をすると、副作用のことを心配し、その子の身体的欠陥があるのではという偏見につながる可能性があるため。	偏見の目でみられる	[Q2-4] 無関係と考えていたが、夫の同僚(中略)の奥さんが妊娠後期で死産されたと聞き、もし夫が私の話をしていたら、その同僚の奥さんが救いを求めていたら、微力でも自分が役に立てたかもと考えたと、必要性も感じられる。しかし自分の辛い体験を誰かれ構わず話されるのも、相手は男性なので抵抗感もあり、どちらともいえない。	経験が役に立つ可能性
	[Q5-A] (最初の流産の翌日頃に自分の母から)手紙で「過酷な運命! 「開い正すようなことはない」と書かれた(のを冷感に感じた)。			
#070	[Q3-3] 自分たちは子どもができない夫婦だと思われ、妻がづらい思いをしそう。まわりのおせっかいな方が、いろいろと身体によいことをすすめてくる。	偏見の目でみられる	[Q2-4] 彼も誰かにはなしていやされなければ辛いと思う。 [Q3-5] 彼も子どもは? と聞かれるのは辛いらしく、話せば気をつかってもらえると思う。	パートナーの辛さが気になる
	[Q3-3] 妻に気づかされるのでは? と感じてしまう。	周囲の気づかい(否定)		
#071	[Q6-B] 大体そういった言葉をかけられる場面が職場だったので、自分への言葉はあまりかけて欲しくない。妻への気づかいの言葉だけで十分。		[Q5-B] そういうことを聞いてくる人は主人のことをとても心配してくれている人だと思うだろうと思う。	
	[Q3-2] 言葉によって傷つけられることが少なくなる。	周囲の気づかい(肯定)		
	[Q3-3] 少なからず、差別・偏見が出るような気がする。	偏見の目でみられる	[Q2-4] 影響はあると思います。私の流産のことを、夫の知人などに話をしたくても、私の気持ちを考えると、話せなかったり、対人関係が難しくなってしまうこともあると思います。	パートナーの辛さが気になる
	[Q8-1] 妊娠中などの同じ職場にいる人たちとの間でお話を聞ける。	人付き合いの減少		
#097	[Q5-B] 不要。同様の体験をしている人ならば、話は別ではあるが。		[Q4-B] 妻は周りの人に気づかってもらううえに、夫にも気づかってもらい、妻の辛さも夫にぶつけてしまうので、(中略)夫のほうが辛い時があるのだと思います。そういう大変な時に(中略)周りの人が夫を気づかってくれれば、夫はとても救われるような気がします。	
	[Q6-B] 不要。だまって見守っていただければよい。			
	[Q7-B] 少しは気がなごむかも知れない。			
	[Q3-3] とくにないが、過日の「有力政治家(原文は固有名詞)」のような、馬鹿げた、田舎の男尊女卑発言の助長。	偏見の目でみられる		
#106	[Q8-1] 不都合ではないが、両方の両親の落胆の強さ。	両親との関係の悪化		
			[Q4-B] (前略)主人の心も安らぐと思います。 [Q5-B] 妻としては、気づかいの言葉を掛けてもらってありがたいと思います。妻は、自分のことで精いっぱいです。主人は、妻をばねまして元気になるようにいってくださりましたが、主人だって悲しくて辛かったと思いますので。	

表 7 (承前)

ケース 番号	夫		妻	
	自由記述回答の抜粋	コード	自由記述回答の抜粋	コード
#160	[Q8-2] 仕事上のつきあいを減らした。前から減らしたいと思っていたので、口実にした面もあると思う。	人付き合いの減少	[Q4-B] 必要だと思うが、夫本人に声をかけてほしい。流死産の直後、妻には夫を気づかう余裕がない。	
	[Q6-B] 不要。気づかされると余計しんどい。			
#162	[Q3-2] 気を使ってもらえるくらい。	周囲の気づかい(肯定)	[Q2-4] 夫はとても明るく、子どもがいなくてもシャレにしてしまうようなタイプなため、表面上は	
	[Q3-3] 伝えた人間からその周辺へと話が大きくなり伝わる。	周囲の話題になる	ないようにみえると思われていると思うが、やはり、	羨望を抱く
	[Q8-1] 人間不信。	人間不信	何度も流産していることで、他人に対してうらやましいとかねたましいという気持ちがあるのではない	
	[Q8-2] 自分の生きる意味を探すようになった。人にやさしくなれる。	人間としての成長	かと思う。誰かが妊娠したと聞いても「すぐ流産するのでは？」というようになった。	
	[Q6-B] 不要。 [Q7-B] 怒る。			

注：ブラケット ( [ ] ) 内の「[Qx-x]」は質問番号。下線のついたコードは「悪い影響あり」に属するもの。

である。「ATS：夫婦共に肯定的」群 (表 6) に比べて「ATS：妻のみ肯定的」群 (表 7) の夫の回答に多くみられるのは、「偏見の目でみられる」ことの苦痛や不安と、実際に体験した親族との葛藤の記述である。「ATS：妻のみ肯定的」群 (表 7) の妻の回答には影響に関する記述自体が少なく、夫が自身の感情を表出できないことの辛さへの懸念が目立つ程度である。他の質問項目の回答

で「ATS：妻のみ肯定的」群の夫婦の違いを補足すると、妻は夫婦共通の知人に夫が流産のことを話すことをよいことであると考えているのに対し (表 8)、夫は相手がカウンセラーであっても相談したいとは考えていない (表 9)。

一方、「ATS：妻もしくは両方が否定的」群の夫は、カウンセラーなどの専門家に相談することにどちらかといえば積極的で (表 9)、一部は他

表 8 「夫へのサポートに対する夫婦の態度」と夫が流産のことを話すことに対する妻の態度の連関

	自分がすでに話をしている共通の知人に夫が流産のことを話してよいか		
	よくない	よい	計
「妻もしくは両方が否定的」群	10	1	11
「夫婦共に肯定的」群	8	8	16
「妻のみ肯定的」群	4	7	11
計	22	16	38

$\chi^2 (2) = 7.42, P < 0.03, \text{Cramer's } V = 0.44$

注：数値はケース数 (組)。P 値はフィッシャーの直接法による正確有意確率 (両側検定)。40 組に足りないのは欠損値のため。

表 9 「夫へのサポートに対する夫婦の態度」とサポート源やリソースに関する夫の選好との連関 (心理カウンセラーへの相談)

	心理カウンセラーへの相談		計
	話さない	話してみたい	
「妻もしくは両方が否定的」群	2	9	11
「夫婦共に肯定的」群	3	12	15
「妻のみ肯定的」群	7	5	12
計	12	26	38

$\chi^2 (2) = 5.82, P < 0.06, \text{Cramer's } V = 0.39$

注：数値はケース数 (組)。P 値はフィッシャーの直接法による正確有意確率 (両側検定)。40 組に足りないのは欠損値のため。



表10 「夫へのサポートに対する夫婦の態度」とサポート源やリソースに関する夫の選好との連関（僧侶・聖職者の話を聞く機会）

	僧侶・聖職者の話を聞く機会		計
	話さない	話してみたい	
「妻もしくは両方が否定的」群	9	1	10
「夫婦共に肯定的」群	8	7	15
「妻のみ肯定的」群	10	1	11
計	27	9	36

$$\chi^2(2) = 6.44, P < 0.05, \text{Cramer's } V = 0.42$$

注：数値はケース数（組）。P値はフィッシャーの直接法による正確有意確率（両側検定）。40組に足りないのは欠損値のため。

の2群には敬遠されているスピリチュアル・ケア（僧侶・聖職者）にも興味を示している（表10）。

#### IV. 考察

不育症を体験した夫へのサポートの研究を今後展開するうえで、本研究の結果から示唆されることは次の2点である：(1) 夫へのサポートを夫自身が肯定的に評価しているのに妻が否定的なケースはまれである。したがって、夫のサポート希求には妻によるサポートの肯定が関連している可能性が高い。(2) 夫へのサポートを妻が肯定的に評価している場合、夫婦は流産体験が夫の対人関係になんらかの影響を及ぼしたと考えていることが多い。

本研究は、完全とはいえ手法で収集されたわずか40組の回答に基づく探索的研究であるため、以上の知見から一般的な因果関係を導くことは早計であり、今後の研究によるデータによる吟味が必要である。医療者を含む専門家による介入を有効に進めるためには、上記の2点から導かれる以下の4点が今後のリサーチ・クエスションとなるであろう。示唆(1)に関連するのは次の3点である：(a) 妻がサポートに対して否定的な態度だが夫は肯定的というケースがほとんどみられないのは、夫が妻の態度に合わせるためか、それとも本研究が妻を介したデータ収集であったがゆえか。(b) 夫のサポート希求は妻の意向に沿うためか、夫自身のニーズによるものか。(c) 夫の身近な人物からのサポートについて妻が肯定的なのに夫が否定的な夫婦の夫に対するサポートは必要か、また必要とすれば誰のどのようなサポートか。示唆(2)については次の1点である：(d)

妻がサポートに肯定的な態度をもつのは、夫のどのような体験をどのように解釈したためか。

#### V. 結語

不育症など周産期の喪失体験の当事者である夫に対して社会的・心理的なサポートを検討する際、妻の観点は重要である。とくに夫が喪失体験を夫自身の対人ネットワークで共有することに対する妻の態度は、夫のサポートへの態度と関連しており（表8）、コーピングへの影響は否めない。周産期医療の現場で対人援助職と夫が妻の介在なしで接触することがまれであることを考えれば、夫（父親）への心理的なサポートを検討する際には、対象へのアクセスを“許可”する“ゲートキーパー”としての妻の役割は無視できないといえよう。

（本研究は平成14-16年度科学研究費補助金若手研究B：課題番号14710109：「流産・死産体験が対人関係に与える影響とトラウマ克服の対人過程に関する探索的研究」の助成を受けた。また本稿の一部は第47回日本母性衛生学会学術集会で発表された）

#### 文献

- 1) Koppel GT, Kaiser D. Fathers at the end of their rope: A brief report on fathers abandoned in the perinatal situation. *Journal of Reproductive and Infant Psychology*. 2001, 19, 249 - 251.
- 2) Dyregrov A, Matthiesen SB. Similarities and differences in mothers' and fathers' grief following the death of an infant. *Scandinavian Journal of Psychology*. 1987, 28, 1 - 15.

- 3) Lang A, Gottlieb LN, Amsel R. Predictors of husbands' and wives' grief reactions following infant death: The role of marital intimacy. *Death Studies*. 1996, 20, 33 - 57.
- 4) Irizarry C, Willard B. The grief of SIDS parents and their understanding of each other's responses. *Omega: Journal of Death and Dying*. 1998/1999, 38, 313 - 323.
- 5) Doka K. *Disenfranchised grief: New directions, challenges, and strategies for practice*. Champaign, IL, Research Press. 2002.
- 6) Samuelsson M, Rådestad I, Segesten K. A waste of life: Fathers' experience of losing a child before birth. *Birth*. 2001, 28, 124 - 130.
- 7) O'Leary J, Thorwick C. Fathers' perspectives during pregnancy, postperinatal loss. *Journal of Obstetric, Gynecologic, and Neonatal Nursing*. 2006, 35, 78 - 86.
- 8) Harvey JH. *Perspectives on loss and trauma: Assaults on the self*. Thousand Oaks, Sage, 2002.
- 9) Glaser B, Strauss A. *The discovery of grounded theory*. New York, AldineTransaction, 1967.
- 10) 佐藤郁哉. 質的データ分析法—原理・方法・実践. 東京, 新曜社, 2008.
- 11) Spradley JP. *The ethnographic interview*. Belmont, CA, Wadsworth, 1979.
- 12) Erikson EH. *Childhood and society* (2nd ed.). New York, Norton, 1963.

**Exploratory research on the impacts of recurrent miscarriage on husbands' social and personal relationships and their association with couples' attitudes toward social support for the husbands**

Department of Human Culture, Faculty of Humanities and Economics, Kochi University  
Masahiro Masuda

**Abstract**

The present study is aimed at exploring clues to appropriate social support provided to husbands whose wives suffer from recurrent miscarriage, by identifying socio-psychological impacts of loss events on husbands' social and personal relationships with members of their various social networks. Forty wives who belonged to a Japanese nation-wide peer support group and their husband participated in mail survey research, and each member of the couple individually filled out a questionnaire including open-end questions asking how each couple viewed the husband's loss experiences. Forty couples were classified into three types based on their attitudes toward social support for husbands: wife-negative type, both-positive type, and wife-only-positive type. The texts of the first type couples' answers to open-end questions did not contain major inductively identified categorical codes representing significant impacts of miscarriage. The latter two types could be differentiated one from the other by with whom the husbands would like to share their loss experiences and to what extent the wives could permit it.

**Key words** : recurrent miscarriage, husband (father), loss events, accounts, social support